



日本文学选读

钟玉秀 王小岐 主编




北京理工大学出版社
BEIJING INSTITUTE OF TECHNOLOGY PRESS

日本文学选读

钟玉秀 王小岐 主 编

郝 蕊 副主编

康 立 葛建敏 编 者

 北京理工大学出版社

BEIJING INSTITUTE OF TECHNOLOGY PRESS

版权专有 侵权必究

图书在版编目(CIP)数据

日本文学选读/钟玉秀,王小岐主编. —北京:北京理工大学出版社,2006.5

ISBN 7-5640-0739-7

I. 日... II. ①钟... ②王... III. ①日语—阅读教学—高等学校—教材 ②文学—作品综合集—日本

IV. ①H369.4 ②I313.11

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 031943 号

出版发行 / 北京理工大学出版社

社 址 / 北京市海淀区中关村南大街 5 号

邮 编 / 100081

电 话 / (010)68914775(办公室) 68944990(批销中心) 68911084(读者服务部)

网 址 / <http://www.bitpress.com.cn>

经 销 / 全国各地新华书店

印 刷 / 北京圣瑞伦印刷厂

开 本 / 787 毫米×1092 毫米 1/16

印 张 / 11.25

字 数 / 271 千字

版 次 / 2006 年 5 月第 1 版 2006 年 5 月第 1 次印刷

印 数 / 1~2500 册

定 价 / 18.00 元

责任校对 / 原 也

责任印制 / 母长新

图书出现印装质量问题,本社负责调换

前 言

《日本文学选读》一书，收集了日本近代、现代知名作家的有名作品，选其中精华部分编辑成书。全书共节选了 15 篇文章，文章后面附有作者介绍、单词注释、语法重点以及阅读后应思考的问题，全书最后部分是句型，便于读者阅读。

该书主要面向大学本科高年级的学生，可作为日本文学选读课的教材使用，同时也适合作为日语语言文学专业硕士生的文学阅读教材。该书的编写特点是注意考虑到了日本文学界的各个流派和思潮的代表作家的代表作品。使读者可以深刻领会各个不同历史时期产生的不同文学派别的社会背景、写作特点和所代表的文学思想。从而更能使我们了解、鉴赏日本文学和体味日本文化，学习不同作家的语言风格和表达艺术。

借此机会仅向日本已故的知名作家表示敬意与怀念，向健在的日本知名作家表示敬佩与谢意。

编 者

目 录

第一課	坊ちゃん	1
第二課	一兵卒	11
第三課	蜜柑	23
第四課	黒い雨(抜粹)	28
第五課	伊豆の踊り子	31
第六課	雪隠成仏	50
第七課	夏の靴	54
第八課	走れメロス	57
第九課	初恋	68
第十課	最初の記憶	79
第十一課	絵本	88
第十二課	一九二八年三月十五日	96
第十三課	ネパールのビール	101
第十四課	あくる朝の蝉	105
第十五課	不意の唾	122
文法注釈		139

第一課 坊ちゃん

夏目 漱石

親譲りのむてっぼうで子供のときから損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと、きく人があるかもしれぬ。べつだん深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいぼっても、そこから飛び降りることはできまい。弱虫や一い。とはやしたからである。小使に負ぶさって帰ってきたとき、親父が大きな目をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるかと言ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類の者から西洋製のナイフをもらってきれいな刃を日に翳して、友達に見せていたら、一人が光ることは光るが切れそうもないと言った。切れぬことがあるか、何でも切ってみせると受け合った。そんならきみの指を切ってみろと注文したから、なんだ指ぐらいこのとおりと、右の手の親指の甲を斜に切り込んだ。幸いナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、いまだに親指は手についている。しかし傷跡は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽くすと、南上がりにいささかばかりの菜園があって、真ん中にくりの木が一本立っている。これは命より大事なくりだ。実の熟する時分は起きぬけに背戸を出て落ちたやつを拾ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三四のせがれがいた。勘太郎はむろん弱虫である。弱虫のくせに四つ目がきを乗り越えて、くりを盗みに来る。ある日の夕方折り戸の陰に隠れて、とうとう勘太郎をつらまえてやった。そのとき勘太郎は逃げ道を失って、一生懸命にとびかかってきた。向こうは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。はちの開いた頭を、こっちの胸へ当ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭が滑って、おれのあわせの袖の中に入った。じゃまになって手が使えぬから、むやみに手を振ったら、袖の中にある勘太郎の頭が、左右へぐらぐらなびいた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食いついた。痛かったから勘太郎をかきねへ押しつけておいて、足がらをかけて向こうへ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目がきを半分崩して、自分の領分へまっ逆さまに落ちて、ぐうと言った。勘太郎が落ちるときに、おれのあわせの方袖ももげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋にわびに行つたついでに、あわせの方袖も取り返してきた。

このほかいはずらはだいぶやった。大工の兼公と魚屋の角を連れて、茂作のにんじん畑を荒らしたことがある。にんじんの芽が出揃わぬところへわらが一面に敷いてあったか

ら、その上で三人が半日相撲を取り続けにとったら、にんじんがみんな踏み潰されてしまった。古川のもっている田んぼの井戸を埋めて、しりを持ち込まれたこともある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲に水がかかるしかけであった。

その時分はどんなしかけか知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ差し込んで、水が出なくなったのを見届けて、うちへ帰って飯を食べていたら、古川が真っ赤になって怒鳴り込んできた。たしか罰金を出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛がつてくれなかつた。母は兄ばかり最質にしていた。この兄はやに色が白くつて芝居の真似をして女形になるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせろくはものにはならないと、おやじがいつた。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云つた。成程ろくなものにはならない。ごらんの通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はたい。ただ懲役に行かはいて生きている許りである。

母が病気で死ぬ二三日前、台所で宙返りをしてへつついの角であれば骨を打って大いに痛かつた。母がたいそう怒つて、おまえのような者の顔は見たくないと言うから、親類へ泊まりに行つていた。するととうとう死んだという報せが来た。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少しおとなしくすればよかつたと思つて帰つてきた。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おっかさんが早く死んだんだと言つた。悔しかつたから、兄の横つつらを張つてたいへんしかられた。

母が死んでからは、親父と兄と三人で暮らしていた。親父はなんにもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様はだめだだめだと口癖のように言つていた。何がだめなんだか今にわからない。妙な親父があつたもんだ。兄は実業家になるとか言つてしきりに英語を勉強していた。元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日にいっぺんぐらいの割りでけんかをしていた。あるとき将棋をさしたら卑怯な待ちごまをして、人が困ると嬉しそうにひやかした。あんまり腹がたつたから、手にあつた飛車を眉間へたたきつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄が親父に言いつけた。親父がおれを勘当すると言ひ出した。

その時はもうしかたがないと観念して先方の言うとおりに勘当されるつもりでいたら、十年来召し使つてゐる清という下女が、泣きながらおやじにあやまって、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかつた。かえつてこの清という下女にきのどくであつた。この下女はもと由緒のある者だつたそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だからばあさんである。この婆さんがどういう因縁か、おれを非常にかわいがつてくれた。ふしぎなものである。母も死ぬ三日前にあいそを尽かした——おやじも年じゅうもてあましてゐる——町内では乱暴者の悪太郎とつまはじきをする——このおれをむやみに珍重してくれた。おれはどうて人に好かれるたちでないとあきらめていたから、他人から木の端のようにとり扱われるのはなんとも思わない、かえつてこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清はときどき台所で人のいないときに「あなたはまっすぐでよい御気性だ」とほめることがときどきあつた。しかしおれには清の言う意味が分からなかつた。いい気性なら清以外の者も、もう少しよくしてくれるだろうと思つた。清がこんなことを言うたびにおれはお世

辞はきらいだと答えるのが常であった。するとばあさんはそれだからいい御気性ですと言っては、うれしそうにおれの顔をながめている。自分の力でおれを製造して誇ってるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれをかわいがった。ときどきはこども心になぜあんなにかわいがるのかと不審に思った。つまらない、よせばいいのにと思った。きのどくだと思った。それでも清はかわいがる。おりおりは自分の小遣いできんつばや紅梅焼を買ってくれる。寒い夜などはひそかにそば粉を仕入れておいて、いつのまにか寝ているまくらもとへそば湯を持ってきてくれる。ときにはなべ焼きうどんさえ買ってくれた。ただ食べ物ばかりではない。くつたびももらった。鉛筆ももらった。帳面ももらった。これはずっとあとのことであるが、金を三円ばかり貸してくれたことさえある。なにも貸せと言ったわけではない。むこうで部屋へ持ってきてお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと言ってくれたんだ。おれはむろん要らないと言ったが、ぜひ使えと言うから、借りておいた。実はたいへんうれしかった。その三円をがまぐちへ入れて、ふところへ入れたなり便所へ行ったら、すぼりと後架の中へ落してしまった。しかたがないから、のそのそ出てきて、実はこれこれだと清に話したところが、清はさっそく竹の棒を捜してきて、取ってあげますと言った。しばらくすると井戸ばたでざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へがまぐちのひもをひきかけたのを水で洗っていた。それから口をあけて一円札をあらためたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火ばちで乾かして、これでいいでしょうと出した。ちょっとかいてみて臭いやと言ったら、それじゃお出しなさい、とり換えてきてあげますからと、どこでどうごまかしたか札の代わりに銀貨を三円持ってきた。この三円は何に使ったか忘れてしまった。いまに返すよと言ったぎり、返さない。今となっては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれるときには必ずおやじも兄もいないときに限る。おれは何がきらいだといって人に隠れて自分だけ得をするほどきらいなことはない。兄とはむろん仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆をもらいたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんにはやらないのかと清にきくことがある。すると清はすましたものでお兄様はお父様が買ってあげなされるからかまいませんと言う。これは不公平である。おやじは頑固だけれども、そんなえこひいきはせぬ男だ。しかし清の目から見るとそう見えるのだろう。全く愛におぼれていたに違いない。元は身分のある者でも教育のないばあさんだからしかたがない。単にこればかりではない。ひいき目は恐ろしいものだ。清はおれをもって将来立身出世してりっぱな者になると思いついていた。そのくせ勉強をする兄は色ばかり白くって、とても役にはたたないと、一人で決めてしまった。こんなばあさんにあってはかなわない。自分の好きな者は必ず偉い人物になって、きらいな人はきつとおちぶれるものと信じている。おれはそのときからべつだん何になるという了見もなかった。しかし清がなるなると言うものだから、やっぱり何かになれるんだろうと思っていた。今から考えるとばかばかしい。あるときなどは清にどんな者になるだろうときいてみたことがある。ところが清にもべつだんの考えもなかったようだ。ただ手車へ乗って、りっぱな玄関のある家をこしらえるに相違ないと言った。

それから清はおれがうちでももって独立したら、いっしょになる気でいた。どうか置い

てくださいと何べんも繰り返して頼んだ。おれも何だかうちがもてるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがお好き、趣町ですか麻布ですか、お庭へブランコをおこしらえあそばせ、西洋間は一つでたくさんですなどかってな計画を一人で並べていた。そのときは家なんか欲しくもなんともなかった。西洋館も日本建てもまったく不用であったから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲が少なくて、心がきれいだと言ってまたほめた。清は何と言ってもほめてくれる。

母が死んでから五六年のあいだはこの状態で暮していた。おやじにはしかられる。兄とは喧嘩をする。清には菓子をもらう、ときどきほめられる。べつに望みもない、これでたくさんだと思っていた。ほかのこどももいちがいにこんなものだろうと思っていた。ただ清が何かにつけて、あなたはおかawaiiそうだ、不幸せだとむやみに言うものだから、それじゃかわいそうで不幸せなんだろうと思った。そのほかに苦になることは少しもなかった。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年めの正月におやじも卒中でなくなった。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならぬ。おれは東京でまだ学問をしなければならない。兄は家売って財産をかたづけて任地へ出立すると言いだした。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄のやっかいになる気はない。世話をしてくれるにしたところで、喧嘩をするから、むうでも何とか言い出すにきまっている。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食ってられると覚悟をした。兄はそれから道具屋を呼んできて、先祖代々のがらくたを二束三文に売った。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲った。この方はだいぶ金になったようだが、詳しいことはいっこう知らぬ。おれは一ヵ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町へ下宿していた。清は十何年いたうちが人手に渡るのが大いに残念がったが、自分のものでないから、しようがなかった。あなたがもう少し年をとっていらっしやれば、ここが御相続ができますものとしきりにくどいていた。もう少し年をとって相続ができるものなら、今でも相続ができるはずだ。ばあさんはなんにも知らないから年さえとれば兄の家がもらえると思っている。

兄とおれはかように分れたが、困ったのは清の行く先である。兄はむろん連れてゆける身分でなし、清も兄のしりにくっついて九州くんだりまで出かける気は毛頭なし、とってこのときのおれは四畳半の安下宿にこもって、それすらもいざとなれば直ちにひき払わねばならぬ始末だ。どうすることもできん。清にきいてみた。どこかへ奉公でもする気かねと言ったらあなたがうちをもって、奥さまをおもらいになるまでは、しかたがないから、おいのやっかいになりましょうとようやく決心した返事をした。このおいは裁判所の書記でまず今日には差し支えなく暮していたから、今までも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住み慣れたうちの方がいいと言って応じなかった。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公替えをして要らぬ気がねをし直すより、おいのやっかいになる方がましだと思ったのだろう。それにしても早くうちをもての、妻をもらえの、来てせわをするのと言う。親身のおいよりも他人のおれのほうが好きなのだろう。

九州へたつ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意に使うがいい、その代わりあとはかまわないと言った。兄にしては感心なやり方だ、なんの六百円ぐらいもらわんでも困りはせんと思ったが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、札を言ってもらっておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと言ったから、異議なくひき受けた。二日たつて新橋の駐車場で別れたぎり兄にはその後一ぺんも会わない。

おれは六百円の用法について寝ながら考えた。商売をしたってめんどくさくってうまくできるものじゃなし、ことに六百円の金で商売らしい商売がやれるわけでもなからう。よしやれるとしても、今のようにじゃ人の前へ出て教育を受けたといばれないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割って一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強ができる。三年間いっしょうけんめいにやれば何かできる。それからどこの学校へ入ろうと考えたが、学問は生来どれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とかいうものはまっぴらごめんだ。新体詩などときは二十行あるうちで一行もわからない。どうせきらいなものなら何をやっても同じことだと思つたが、幸い物理学校の前を通りかかったら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書もらつてすぐ入学の手続きをしてしまった。今考えるとこれも親譲りのむてっぽうから起つた失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたがべつだんたちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。しかしふしぎなもので、三年たつたらとうとう卒業してしまつた。自分でもおかしいと思つたが苦情を言うわけもないからおとなしく卒業しておいた。

卒業してから八日めに校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出かけていったら、四国辺のある中学校で数学の教師が要る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を言うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。もっとも教師以外に何をしようというあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようと思つて即席に返事をした。これも親譲りのむてっぽうがたたつたのである。

ひき受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居してごとはただの一度も聞いたことがない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的のんきな時節であつた。しかしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生といっしょに鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。たいへんな遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせろくな所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるかわからん。わからんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もっとも少々めんどくさい。

家をたたんでからも清の所へはおりおり行つた。清のおいというのは存外けっこうな人である。おれが行くたびに、おりさえすれば、なにくれともてなしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろおれの自慢をおいに聞かせた。いまに学校を卒業すると麴町辺へ屋敷を買つて役所へ通うのだなどと吹聴したこともある。一人で決めて一人でしゃべるから、こっちは困つて顔を赤くした。それも一度や二度ではない。おりおりおれが小さいとき寝小便をしたことまでもち出すには閉口した。おいは何と思つて清の自慢を聞いていたかわ

からぬ。ただ清は昔ふうの女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従のように考えていた。自分の主人ならおいのためにも主人に相違ないのがてんしたものらしい。おいこそいつらの皮だ。

いよいよ約束が決まって、もうたつという三日前に清を訪ねたら、北向きの三畳に風邪をひいて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いのか、坊っちゃんいつうちをおもひなさいますときいた。卒業さえすれば金がしぜんとポケットの中にわいてくると思っている。そんなに偉い人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよばかっている。おれは単簡に当分うちはおもひない。田舎へ行くんだと言ったら、非常に失望したようすで、ごま塩のびんの乱れをしきりになでた。あまりきのどくだから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰めてやった。それでも妙な顔をしているから「何を土産に買ってきてやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後のささあめが食べたい」と言った。越後のささあめなんて聞いたこともない。だいいち方角が違う。「おれの行く田舎にはささあめはなさそうだ」と言って聞かしたら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と言うのと「箱根の先ですか手前ですか」と問う。ずいぶんもてあました。

出立の日には朝から来て、いろいろせわをやいた。来る途中小間物屋で買ってきた歯みがきとようじと手ぬぐいをズックのカバンに入れてくれた。そんな物は要らないと言ってもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出たとき、車へ乗り込んだおれの顔をじっと見て「もうお別れになるかも知れません。ずいぶんどきげんよう」と小さな声で言った。目に涙がいっぱいたまっている。おれは泣かなかった。しかしもう少しで泣くところであった。汽車がよっぽど動きだしてから、もうだいじょうぶだろうと思って、窓から首を出して、ふり向いたら、やっぱり立っていた。なんだかたいへん小さく見えた。

作者紹介

夏目 漱石(なつめ そうせき) (1867—1916)

慶応3年1月5日(新暦2月9日)江戸牛込馬場下横町に生まれる。本名は夏目金之助。帝国大学文科(東京大学文学部)を卒業後、東京高等師範学校、松山中学、第五高等学校などの教師生活を経て、1900年イギリスに留学する。帰国後、第一高等学校で教鞭をとりながら、1905年処女作「吾輩は猫である」を発表。1906年「坊っちゃん」、「草枕」を発表。1907年教職を辞し、朝日新聞社に入社。そして「虞美人草」、「三四郎」などを発表するが、胃病に苦しむようになる。1916年12月9日、「明暗」の連載途中で胃潰瘍で永眠。享年50歳であった。

単語

親譲り	[おやゆずり]	[名]	父(母)遺留下来(的东西)
無鉄砲	[むてっぽう]	[形动]	鲁莽, 莽撞
損	[そん]	[名]	亏损
飛び降りる	[とびおりる]	[上一自]	跳下
腰を抜かす	[こしをぬかす]	[词组]	站不起来; 非常吃惊
無闇	[むやみ]	[形动]	胡乱, 随便

第一課 坊ちゃん

別段	[べつだん]	[名]	另外,并(不)
新築	[しんちく]	[名]	新建的房屋
首を出す	[くびをだす]	[词组]	伸出头,探出头
同級生	[どうきゅうせい]	[名]	同班,同年级
冗談	[じょうだん]	[名]	玩笑,戏言,笑话
威張る	[いばる]	[五自]	自豪
弱虫やしい	[よわむしやしい]	[形]	胆小的,窝囊的
囃す	[はやす]	[五他]	嘲笑
小使	[こづかい]	[名]	学校的职员
負ぶさる	[おぶさる]	[五自]	让(人)背着;依靠别人;靠别人帮助
親父	[おやじ]	[名]	父亲,爸爸;老头儿
刃	[やいば]	[名]	刃,刀刃,刀口
翳す	[かざす]	[五他]	举到头上;举起照亮;罩个阴影
請合う	[うけあう]	[五他]	承担,保证
注文する	[ちゅうもんする]	[ス他]	订货,要求
親指	[おやゆび]	[名]	大拇指
斜	[はす]	[名]	斜,歪
傷跡	[きずあと]	[名]	伤痕,伤疤
起きぬけ	[おきぬけ]	[名]	刚起来,刚起床
背戸	[せど]	[名]	厨房门,后门;房后
質屋	[しちや]	[名]	当铺
せがれ		[名]	小孩子,小崽子
四つ目がき	[よつつめがき]	[名]	用竹子编成的栅栏
折り戸	[おりど]	[名]	折叠式的门
つかまえる	[捉まえる]	[下一他]	抓住
はちの開いた頭		[词组]	宽脑门的脑袋
ぐいぐい		[副]	一个劲儿地
袷	[あわせ]	[名]	夹衣服
ぐらぐら		[副]	摇晃地,摆动地
靡く	[なびく]	[五自]	随着摇摆
二の腕	[にのうで]	[名]	上臂
垣根	[かきね]	[名]	篱笆
足がらをかける		[词组]	下绊子
がた		[名]	大约,左右
まっ逆さま	[まっさかさま]	[名]	头朝下,倒栽葱
掬げる	[もげる]	[下一自]	脱落下来,掉下来
出揃う	[でそろう]	[五自]	全部出齐
しりを持ち込まれ		[词组]	受到牵连,找上门来
孟宗	[もうそう]	[名]	孟宗竹的略称
そこいら		[代]	(俗)那,那边
怒鳴る	[どなる]	[五自]	大声喊叫

日本文学选读

宙返り	[ちゅうがえり]	[名]	翻筋斗
へつつい		[名]	灶, 炉灶
あばら		[名]	肋骨
親不孝	[おやふこう]	[名]	不顺父母
横つつら	[よこつつら]	[名]	面颊
貴様	[きさま]	[代]	你这个东西, 你小子
性分	[しょうぶん]	[名]	性格
卑怯だ	[ひきょうだ]	[形动]	懦弱; 卑鄙
待ちごま	[まちごま]	[名]	象棋中堵住对方“王”逃路的棋子
冷やかす	[ひやかす]	[五他]	冷却; 嘲弄
眉間	[みけん]	[名]	两眉之间
勘当する	[かんどうする]	[ス他]	断绝父子关系
下女	[げじょ]	[名]	女佣人, 女仆
気の毒	[きのどく]	[名]	可怜, 怜悯
由緒	[ゆいしょ]	[名]	来源
瓦解	[がかい]	[名]	瓦解, 崩溃
零落	[れいらく]	[名]	沦落, 衰败
愛想	[あいそ]	[名]	亲切; 招待
持て余す	[もてあます]	[五他]	无法对付
爪弾き	[つまはじき]	[名]	用手指弹; 嫌恶
ちやほや		[副]	娇养地, 奉承地
不審	[ふしん]	[形动]	可疑, 疑问
気性	[きしょう]	[名]	脾气, 性情
世辞	[せじ]	[名]	恭维(话), 奉承
止す	[よす]	[五他]	停止
金鐔	[きんつば]	[名]	金属刀护手
紅梅焼き	[こうばいやき]	[名]	烤成梅花形的煎饼
仕入れる	[しいれる]	[下一他]	买进
鍋焼きうどん	[なべやきうどん]	[名]	一种沙锅面
食い物	[くいもの]	[名]	食物; 剥削的对象
蝦蟆口	[がまぐち]	[名]	(蛙嘴式, 荷包式)小钱包
懐	[ふところ]	[名]	怀, 胸
すぼりと		[副]	完全脱落
後架	[こうか]	[名]	厕所
のそのそ		[副]	慢吞吞地
改める	[あらためる]	[下一他]	改, 改变
火鉢	[ひばち]	[名]	火盆
頑固	[がんこ]	[形动]	顽固
溺れる	[おぼれる]	[下一自]	淹没, 沉溺
ひいき目	[ひいきめ]	[名]	偏袒的看法

第一課 坊ちゃん

落ちぶれる	[おちぶれる]	[下一自]	衰败,落魄
了見	[りょうけん]	[名]	想法
持てる	[もてる]	[下一自]	能保持,受欢迎
ブランコ		[名]	秋千
拵える	[こしらえる]	[下一他]	制造;凑钱
不用	[ふよう]	[名]	不需要
一概に	[いちがい]	[副]	一概,一律
閉口	[へいこう]	[名]	闭口无言
卒中	[そっちゅう]	[名]	中风
口がある	[くちがある]	[词组]	有工作,找到工作
出立	[しゅったつ]	[名]	出发,动身
厄介	[やっかい]	[形动]	麻烦
なまじい		[形]	勉强
瓦落多	[がらくた]	[名]	不值钱的东西
二束三文	[にそくさんもん]	[名]	非常便宜
家屋敷	[うちやしき]	[名]	宅邸
周旋	[しゅうせん]	[名]	周旋
金満家	[きんまんや]	[名]	大财主,富豪
小川町	[おがわちょう]	[名]	小河区
御相続	[ごそうぞく]	[名]	继承
口説く	[くどく]	[五他]	劝说,说服
くっ付く	[くつつく]	[五自]	紧贴在一起
下んだり	[くんだり]	[名]	下;从首都到地方
毛頭	[もうとう]	[副]	丝毫,一点也
安下宿	[やすげしゆく]	[名]	便宜的住处
いざとなれば		[词组]	遇紧急情况
差し支える	[さしつかえる]	[下一动]	妨碍,障碍,有影响
随意	[ずい]	[副]	随意地
淡泊	[たんぱく]	[形动]	坦率,淡然
異議	[いぎ]	[名]	异议,不同的意见
よし=たとえ		[副]	纵然
生来	[しょうらい]	[名]	有生以来
真っ平	[まっぴら]	[副]	务必;绝对不干
失策	[しっさく]	[名]	失策
宛	[あて]	[名]	想法,目标
即席	[そくせき]	[名]	即刻,当场
崇る	[たたる]	[五自]	作祟,产生恶果
蟄居	[ちつきよ]	[名]	闭门索居
小言	[こごと]	[名]	申斥,牢骚
引き払う	[ひきはらう]	[五他]	搬迁;拆除
甥	[おい]	[名]	侄子,外甥

存外	[ぞんがい]	[名]	没想到
吹聴	[ふいちょう]	[名]	吹嘘
合点	[がてん]	[名]	认可
面の皮	[つらのかわ]	[名]	脸皮
馬鹿気る	[ばかげる]	[下一自]	愚蠢
越後	[えちご]	[地名]	现在的新泻县
笹飴	[ささあめ]	[名]	细竹糖
方角	[ほうがく]	[名]	方向, 方位
見当	[けんとう]	[名]	估计; 目标
箱根	[はこね]	[地名]	在神奈川県
小間物屋	[こまものや]	[名]	妇女小件用品杂货店
ズック		[名]	麻布; 帆布鞋
プラットホーム		[名]	月台, 站台

✂ 文法表現

1. 文語否定助動詞「ぬ」「ん」
2. 慣用型「ぬけに」
3. 接尾語「がた」
4. 接尾語「ちぎり」
5. 慣用句「きさま」
6. 慣用型「ねばならぬ」
7. 否定推量意志助動詞「まい」
8. 副助詞「ばかり」
9. 慣用型「さえ～ば」
10. 推断助動詞「らしい」
11. 様態助動詞「そう」
14. 慣用型「ばこそ」
15. 副助詞「すら」(も)

✂ 読解

次の質問を考えてみよう。

1. 坊ちゃんの性格はどうですか。文章の言葉で描きなさい。
2. 坊ちゃんの家のご生活はどうでしたか。お父さんとお兄さんの性格を文章の言葉で描きなさい。
3. 文章を読んで、当時の日本の社会を想像しなさい。
4. 清という人の当時の社会での地位は何でしょうか。
5. 「おれはどうてい人に好かれるたちでないとききらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない」とあるが、この言葉の意味を解釈しなさい。
6. 坊ちゃんは物理学校を卒業したらなぜ四国辺りにある中学校の教師になったか。物理学校はどこにあるか。文章のどの言葉からわかったか。
7. 「清はおれを前へ置いて、いろいろおれの自慢を甥に聞かせた」この文の意味を説明しなさい。
8. 「ごま塩のびんの乱れをしきりになでる」という言葉は誰のどんな気持ちを描いたか。
9. 坊ちゃんの「清」に対する気持ちを話してみなさい。
10. この文は「坊ちゃん」という小説の冒頭部分です。ひととおりに読んで、感想を話しなさい。

第二課 一兵卒

田山 花袋

渠は歩き出した。

銃が重い、背囊が重い、脚が重い、アルミニウム製の金椀が腰の剣に当たってカタカタと鳴る。その音が興奮した神経をおびただしく刺戟するので、幾度かそれを直してみたが、どうしても鳴る、カタカタと鳴る。もう厭になってしまった。

病気はほんとうに治ったのでないから、息が非常に切れる。全身には悪熱悪寒が絶えず往来する。頭脳が火のように熱して、顚がはげしい脈を打つ。なぜ、病院を出た？ 軍医があとがたいせつだと言ってあれほど留めたのに、なぜ病院を出た？ こう思ったが、渠はそれを悔いはしなかった。敵の捨てて逃げた汚い洋館の板敷き、八畳くらいの室に、病兵、負傷兵が十五人、衰顔と不潔と叫喚と重苦しい空気と、それにすさまじい蠅の群集、よく二十日も辛抱していた。麦飯の粥に少しばかりの食塩、よくあれでも飢餓を凌いだ。かれは病院の背後の便所を思い出してゾットした。急造の穴の掘りようが浅いので、臭気が鼻と眼とをはげしく撲つ。蠅がワンと飛ぶ。石灰の灰色に汚れたのが胸をむかむかさせる。

あれよりは……あそこにいるよりは、この闊々とした野の方がいい。どれほど好いかしれぬ。満洲の野は荒漠として何も無い。畑にはもう熟しかけた高粱が連なっているばかりだ。けれど新鮮な空気がある、日の光がある、雲がある、山がある、——すさまじい声が急に耳に入ったので、立ち留まってかれはそっちを見た。さっきの汽車がまだあそこにいる。釜のない煙筒のない長い汽車を、支那苦力が幾百人となく寄ってたかって、ちょうど蟻が大きな獲物を運んでいくように、えっさらおっさら押していく。

夕日が画のように斜めにさし渡った。

さっきの下士があそこに乗っている。あの一段高い米の吠の積み荷の上に突っ立っているのが彼奴だ。苦しくってとても歩けんから、鞍山站まで乗せていってくれと頼んだ。すると彼奴め、兵を乗せる車ではない、歩兵が車に乗るといふ法があるかとどなった。病気だ、ご覽の通りの病気で、脚気をわずらっている。鞍山站の先まで行けば隊がいるに相違ない。武士は相見互いということがある、どうか乗せてくれって、たつて頼んでも、言うことを聞いてくれなかった。兵、兵といつて、筋が少ないと馬鹿にしやがる。金州でも、得利寺でも兵のおかげで戦争に勝ったのだ。馬鹿奴、悪魔奴！

蟻だ、蟻だ、ほんとうに蟻だ。まだあそこにいやがる。汽車もああなつてはおしまいだ。ふと汽車——豊橋を発ってきた時の汽車が眼の前を通り過ぎる。停車場は国旗で埋められている。万歳の声が長く長く続く。と忽然最愛の妻の顔が眼に浮かぶ。それは門出の時の

泣顔ではなく、どうした場合であったか忘れたが心からかわいいと思った時の美しい笑い顔だ。母親がお前もうお起きよ、学校が遅くなるよと揺り起こす。かれの頭はいつか子供の時代に飛び返っている。裏の入江の船の船頭が禿頭を夕日にてかてかと光らせながら子供の一群に向かってどなっている。その子供の群れの中にかれもいた。

過去の面影と現在の苦痛不安とが、はっきりと区画を立てておりながら、しかもそれがすれすれにすりよった。銃が重い、背囊が重い、脚が重い。腰から下は他人のようで、自分で歩いているのかいないのか、それすらはつきりとはわからぬ。

褐色の道路——砲車の轍や靴の跡や草鞋の跡が深く印したままに石のように乾いて固くなった路が前に長く通じている。こういう道路にはかれはほとんど愛想をつかしてしまった。どこまで行ったらこの路はなくなるのか。どこまで行ったらこんな路は歩かなくってもよくなるのか。故郷のいさご路、雨上がりの湿った海岸の砂路、あの滑らかな心地の好い路が懐しい。広い大きい道ではあるが、一つとして滑らかな平らかなところがない。これが雨が一日降ると、壁土のように柔らかくなって、靴どころか、長い脛もその半ばを没してしまうのだ。大石橋の戦争の前の晩、暗い闇の泥濘を三里もこねまわした。背の上から頭の髪まではねが上がった。あの時は砲車の援護が任務だった。砲車が泥濘の中に陥って少しも動かぬのを押して押して押し通した。第三聯隊の砲車が先に出て陣地を占領してしまわなければ明日の戦いはできなかったのだ。そして終夜働いて、翌日はあの戦争。敵の砲弾、味方の砲弾がぐんぐんと厭な音を立てて頭の上を鳴って通った。九十度近い暑い日が脳天からじりじりと照りつけた。四時過ぎに、敵味方の歩兵はともに接近した。小銃の音が豆を煎るように聞こえる。時々シュッシュュッと耳のそばを掠めていく。列の中であつと言ったものがある。はッと思って見ると、血がだらだらと暑い夕日に彩られて、その兵士はガックリ前にのめった。胸に弾丸があたったのだ。その兵士は善い男だった。快活で、洒脱で、何ごとにも気が置けなかった。新城町のもので、若い鼻があったはずだ。上陸当座はいっしょによく徴発に行ったっけ。豚を逐い廻したっけ。けれどあの男はもはやこの世の中にいないのだ。いないとはどうしても思えん。思えんがいないのだ。

褐色の道路を、糧餉を満載した車がぞろぞろ行く。騾車、驢車、爺のウオウオウイウイが聞こえる。長い鞭が夕日に光って、一種の音を空気に伝える。路の凸凹がはげしいので、車は波を打つようにしてガタガタ動いていく。苦しい、息が苦しい。こう苦しうってはしかたがない。頼んで乗せてもらおうと思ってかれは駆け出した。

金椀がカタカタ鳴る。はげしく鳴る。背囊の中の雑品や弾丸袋の弾丸がけたたましく躍り上がる。銃の台が時々脛を打って飛び上がるほど痛い。

「オーい、オーい。」

声が立たない。

「オーい、オーい。」

全身の力を絞って呼んだ。聞こえたに相違ないが振り向いてもみない。どうせ碌なことではないと知っているのだろう。一時思い止まったが、また駆け出した。そして今度はその最後の一輛にようやく追いついた。

米の吠が山のように積んである。丸顔の厭な顔だ。有無をいわせずその車に飛び乗った。そして吠と吠との間に身を横たえた。しかたがないというふうでウオーウオーと馬を